旺文社文庫

戦争と平和（上）

—縮訳版—

トルストイ著
小沼文彦訳

「旺文社文庫」刊行のことば

いかなる時代においても、書物は人間の最大の喜びであり、最高の教いである。若い日読んだ書物は、人間の生涯にわたって影響をあたえ、第二の天性となり、人格となるであろう。

かかる観点から旺文社は、若き世代のための出版社としての使命感にたって、ここに旺文社文庫を刊行する。内容は、洋の東西にわたり、時代の古今をつらぬき、文学・科学・伝記・随筆・思想、万般におよび、いずれも知識人たらんとする者が、生涯の教養の基盤として、若い日一読すべき価値のあるものを可及的に多くそなえんとするものである。

読むに価値あるものを、でき得るだけ楽しくやすく、読みやすく提供することは出版社の使命である。出版道義を強く信奉せんとしているわが社は、この目的にひたむきに献身するものである。あえてわが社の志を理解されご支援あらんことを。

昭和 [illegible]

埼玉県立熊谷図書館蔵書

〔編集顧問〕
（五十音順）
[illegible] 司　木村　毅
[illegible] 健　森戸辰男

旺文社文庫　戦争と平和（上）　240円
—縮訳版　全二巻—

昭和40年12月15日　初版発行
昭和43年7月1日　重版発行

訳者　小沼文彦
発行者　鳥居正博
印刷所　株式会社厚徳社

発行所　株式会社旺文社
東京都新宿区横寺町
電話　東京(03) 269-2111〔代〕

620-09

5S57-16-6(18,47)
© 小沼文彦 1965
（許可なしに転載，複製することを禁じます）

（中村印刷・清水印刷・穴口製本）

落丁・乱丁・不良本はお取り替えします
書店または本社に直接お申し出ください

旺文社文庫

戦争と平和（上）

—縮訳版—

旺文社

原典はきわめて大部のため、この訳では、原作の意図をまげない範囲で削減し、読者の便をはかった。

まえがき

トルストイ（レフ・ニコラーイェヴィッチ、一八二八―一九一〇）の大作『戦争と平和』（Voina i mir）は、「戦争」と「平和」の部分にわけられた、伯爵レフ・トルストイの指揮した「ナポレオン戦争」の記録と言われている。

したがって当時の社会情勢なり歴史なりの予備知識がないと、作品それ自体は平易なものであるが、なかなかすんなりと理解できないところが出てくると思う。いずれこの巻末には詳しい解説がつくので、作品の解説はそれに譲ることにして、ここでは簡単にこの大作の背景となった時代のことを説明しておくことにしよう。

一八〇三年にはじまった英仏戦争は、のちに「ナポレオン戦争」と呼ばれるようになった、ほとんどヨーロッパ全土にわたる大戦争にまで発展したが、これはヨーロッパの主導権を握る機会をねらっていたアレクサンドル一世にとっては、絶好のチャンスともいうべきものであった。

一時武装中立の立場に立っていたロシヤは、一八〇五年にはオーストリヤやプロシャと手を結んで、イギリスのいわゆる対仏大同盟に参加することになったが、その年の十二月アウステルリッツ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

の大会戦に、同盟軍はナポレオンに大敗し、つづいてその翌年にはプロシャ軍がナポレオンに撃破されて、ついにプロシャは大同盟から脱落することになった。

一八〇七年の初頭、ナポレオンはふたたびロシヤ軍と対戦したが、ロシヤ軍の抵抗によって決定的な勝利を得ることができず、一八〇七年にはナポレオンとアレクサンドル一世とのあいだに、チルジットの和約が成立した。この和約に基づいてアレクサンドル一世は、イギリスと断交して大陸封鎖令に参加し、その結果、フィンランド、ベッサラビヤ、グルジヤの諸地方を併合することに成功した。

しかしこのチルジットの和約の結果イギリスと断交したために、ロシヤの穀物輸出は大きな打撃を受け、一種の経済恐慌のようなものが起こったために、この和約はロシヤ国内でさんざんの不評を買うことになった。そこでアレクサンドル一世はイギリスとの通商の復活を黙認することになり、ナポレオンの大陸封鎖令はその効果を失うようになった。

ナポレオンはそれを不満に思って、アレクサンドルの妹アンナとの婚約も不調に終わり、一八一二年には、ナポレオンはポーランドに大軍を集結して、ロシヤ遠征の準備に取りかかった。

一八一二年六月二十四日、フランス軍三五万六千、ポーランド軍六万を主力とする六七万八千の大軍は、一せいに行動を開始して四方面からロシヤに向かって進発した（ヒットラーがソヴェートに対して行動を開始したのもやはり六月のことである）。これに対してロシヤ軍の総兵力は一八万に過ぎなかった。

ロシヤ軍は作戦によって後退をつづけたが、これがロシヤ国民の愛国心を刺激することになり、

ここにいわゆる「大祖国戦争」がはじまった。引退していた六十七歳のクトゥーゾフが総司令官に任命され、ナポレオンの意表をついて、ナポレオンの大軍をロシヤ本土に誘い込み、その補給路をおびやかしながら、好機をつかんで反撃に出るという作戦を取った（ここでもまたヒットラーの対ソ戦が思い出される）。

クトゥーゾフの最初の反撃はボロジノの会戦で、ナポレオンの大軍に大きな損害を与えたクトゥーゾフは、モスクワの前面をナポレオンに解放して、整然と後退するという作戦に出た。

意気揚々とモスクワに入城したナポレオンの見たものは、意外にも無人の廃墟であり、六日六晩にわたってつづいた大火によって、ナポレオンの大軍は糧食や住居を手に入れる望みを失うことになる。ナポレオンは見事にクトゥーゾフの罠にかかったのである。

十月六日、ついにモスクワ撤退に踏み切ったナポレオンの大軍は、クトゥーゾフの予定したコースを取ったために、いたるところで正規軍やパルチザン部隊の襲撃を受け、さらにロシヤの冬将軍、つまり寒気に悩まされ、飢餓と疲労と疫病によって、さしもの大軍もパリに帰還したのはわずかに三万と言われている。四〇万の兵がロシヤの平原の中に倒れ、二〇万が捕虜となったわけである。

こうしてロシヤは対仏大同盟の主導権を握ることになり、一八一四年、同盟軍はパリに入城、一八一五年のウィーン会議ではついに宿望を達成したアレクサンドル一世が、会議の主役におさまることになった。

しかしこの「大祖国戦争」のおかげで、ロシヤは経済的にはまったく荒廃し、地主はインフレと

租税負担に悩まされ、その結果、農奴はさらに搾取されることになった。

こうして農奴制への反対運動はしだいに勢力をまし、革命勢力が力を得て、ついに一八二五年のデカブリストの反乱として爆発することになる。デカブリスト（十二月党員）のすべてがこの「大祖国戦争」に青年将校として参加し、ヨーロッパの土を踏んだ者ばかりであるということも、興味のある事実である。

トルストイは、はじめこのデカブリストたちの革命運動を中心にした作品を計画したが、けっきょく、そのためには「大祖国戦争」にまでさかのぼらなくてはならなくなった。こうして資料を集めているうちに、デカブリストの活動を描くという構想は、このロシヤ国民にとって大きな意味をもつ歴史的な大戦が中心になることになり『戦争と平和』が生まれることになったのである。

『戦争と平和』が「大祖国戦争」を描こうとしながら、一八〇五年の出来ごとからはじまっているのも、これでおわかりになることと思う。

『戦争と平和』の舞台となっているのは、十九世紀初頭の両首都、つまり、ペテルブルクとモスクワを中心にして、ナポレオン戦争の舞台となった全ヨーロッパである。そして、第一部の「戦争」――アウステルリッツの戦闘とアンドレイ公爵の負傷、第二部の「平和」――首都の上流社交界、というように、「戦争場面」と「平和な生活」を交互に描くことによって、この歴史的なナポレオン戦争とその当時のロシヤの生活を見事に浮きぼりにしている。

『戦争と平和』は世界の文学史の中でもまれに見る長編で、日本文にして原稿用紙四千五百枚以

上にのぼる大作である。『戦争と平和』の名前はあまりにも有名で、また青年の必読書ともなっているので、この作品を手に取られた人は無数と言ってもいいくらいであろうが、さてこれを実際に通読した人となると意外に少ないのではないかと思う。夏休みなどに非常な意気ごみで取り組んでも、作品があまりにも厖大なのと、登場人物が多過ぎ、しかもそれがそろいもそろってあまりなじみのないロシヤ名前ときているので、五日か一週間ぐらいであきらめてしまったという経験談をよく耳にする。確かにそのとおりにちがいないと思う。

私の留学時代のロシヤ人の学友の中にも『戦争と平和』を十回読んだ、十五回読んだなどという強者もいたが、それは主として男の学生で、女子学生の中には『戦争と平和』の「平和」の部分だけを五回読んだ、十回読んだという人が多いようであった。これもひとつの読み方であろう。

原則として、こうした名作は読み通さなければ意味のないものかもしれない。また私も、原則として、いわゆる名作のダイジェスト化には反対である。しかしともかく、ダイジェストでも読まないよりは読んだほうがいいに決まっている。少なくとも、それがなにかのきっかけにでもなれば、これに越したことはないのである。これがあえてこの名作を「縮訳版」にするという、ある意味では原作者に対する冒瀆に踏みきらせた理由である。

ここでは原作を約四分の一に削減したが、トルストイの意図をできるだけ生かすように努めたつもりである。不幸にして原作の香気を十分に伝ええず、そのために『戦争と平和』なんてこんなものかと思われたら、その責任は全部私にある。原作を無残に切りこまざいたことにも責任を痛感している。ただこの「縮訳版」によって『戦争と平和』を一通り読まれる人がふえ、さらにこれをき

っかけにもう一度、全訳に取り組まれる人がふえれば、訳者の幸福これにすぎるものはない。

なお、この作品には、それぞれの登場人物の社会的背景に応じて、その会話に個性をもたせるためにフランス語が非常に多く用いられている。つまり、母国語よりもフランス語のほうを上品なものとして好んだ、当時の上流貴族の生活をそのままうつしたものである。この訳文の中では《　》でつつんであるものが、それらの外国語の使われている部分である。

一九六五年　十二月

小沼文彦

目次

まえがき 三
主要登場人物 一一
第一編 一三
第一部 一五
第二部 一〇〇
第三部 一五八
第二編 二二七
第一部 二二九
第二部 二七三
第三部 三一〇
第四部 三六一
第五部 三七七

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

解　説　小沼文彦　四三
トルストイの人と文学　四三
作品解説　四三
作品鑑賞　（下巻）
人間の無限のおもしろさ　本多秋五　（下巻）
代表作品解題　（下巻）
参考文献　（下巻）
年　譜　（下巻）
あとがき　（下巻）
挿絵　V・A・セーロフ

主要登場人物

アンドレイ・ボルコンスキー公爵 ロシヤの名門貴族の家に生まれた青年将校。あらゆる面ですばらしい資質に恵まれている。

リーザ ペテルブルクで最も魅力的な婦人と定評のあるアンドレイの妻。

マーリヤ アンドレイの妹。従順で宗教心の強い令嬢。

ニコライ老公爵 アンドレイの父。いまは引退して地方住まいをする旧時代の将軍。

ブリエンヌ 令嬢マーリヤの小間使。典型的なフランス娘。

ワシーリイ・クラーギン公爵 権謀術数をこととする政界の有力者。ピエールの義理の父。

エレン その長女でピエールの妻。美人ではあるが、無知で淫蕩的な女性。

イッポリート その長男。おとなしいだけが取柄の、あまり利口でない外交官。

アナトーリ その次男。姉に似て美しいが、品行不良の青年。

ピエール・ベズーホフ 前時代の高官ベズーホフ伯爵の私生児。のちに伯爵家をついで大富豪になったが、思索を好み実行力に欠けた青年。

イリヤー・ロストフ伯爵 好人物の中流貴族。この伯爵夫妻はトルストイの祖父母をモデルにしたものといわれる。

ヴェーラ その長女。モデルはトルストイの義理の姉。

ニコライ・ロストフ その長男。単純ではあるが実行力にも恵まれた青年。モデルはトルストイの父。

ナターシャ その次女。健康で活動的な美しい令嬢。トルストイの義妹がモデル。

ペーチャ　その次男。

ソーニャ　幼いときからロストフ家で育てられた少女。モデルはトルストイの伯母の少女時代で、彼女とニコライの関係は、トルストイの父とこの伯母の関係をそっくり借用したものといわれる。

ボリース・ドルベツコーイ　公爵。ドルベツカーヤ夫人のむすこで、ロストフ家の親戚。世俗的で如才(じょさい)なく立ちまわる青年将校。

アンナ・パーヴロヴナ・シェーレル　皇太后づきの女官で、政界にも勢力をもつ社交界の中心人物。

クトゥーゾフ　元帥。トルコ戦争の英雄。オーストリヤ援助のためにロシヤ軍総司令官に返り咲いたロシヤ人のひとつの典型。

バグラチオン　公爵。オーストリヤ派遣(はけん)ロシヤ軍前線部隊司令官。

ベルク　ドイツ系の世わたりのうまい近衛将校。

ドーロホフ　アナトーリ・クラーギンの友人で、素行のおさまらない青年将校。

カラターイェフ　ピエールが捕虜になったときの仲間のロシヤ兵。クトゥーゾフと並んで、ロシヤ人のひとつの典型といわれる。

アラクチェーイェフ　伯爵。ロシヤの陸軍大臣。

スペランスキー　成り上がり者の有力な政治家。

ラストープチン　伯爵。モスクワの総督で総司令官。

第一編

第一部

一

「《いかがでございます、公爵、ジェノアもルーカーもボナパルト一族の支配地、領地同然になってしまったじゃございませんの。いいえ、前もって申し上げておきますけれど、もしもあなたが戦争は始まっているということをお認めにならなかったり、あの反キリストの（そうですとも、あの男は反キリストだと、わたしは信じて疑いません）汚らわしい行為、恐ろしい行為を、まだこの上なにからなにまで弁護なさるおつもりでしたら、――あなたのお顔なぞもう見たくもございません。そんな人はもうわたしのお友だちでもなければ、またあなたがいつもお口になさるような》わたしの忠実な奴隷でもございませんわ。でも、おいであそばせ、よくいらっしゃいましたこと。《どうやらわたし、あなたをびっくりおさせ申したようでございますわね》。どうぞお掛けになって、お話をなさってくださいましな」

時は一八〇五年の七月、こう言ったのは皇太后マリヤ・フョードロヴナの女官であり側近の女性である、有名なアンナ・パーヴロヴナ・シェーレルで、彼女の催した夜会にだれよりも早くやって来た、要路の大官であるワシーリイ公爵に対する出迎えのことばであった。アンナ・パーヴロヴナはここ何日か咳に悩まされていて、当人のことばを借りれば、インフルエンザにかかっていた（イ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton